

種子島の中踊り小踊りについて

種子島の踊りは、踊りの規模や人数によって大踊り・中踊り・小踊りに分類されます。中踊りと小踊りの明確な区別はありませんが、一般的に20～30人程が「中踊り」、10～20人程が「小踊り」とされています。

中踊り・小踊りでは、手踊り・センス踊り・棒踊りの他、各種あります。

ひょうたん踊り

「ひょうたん踊り」は腰にひょうたんをぶら下げて踊ることから、そう呼ばれています。また、歌詞に「金山」の文句があることから、「金山節」とも呼ばれています。

元来は男性だけの手踊りですが、集落によっては、女性も踊る所やお面を被って踊る所もあります。その大



上中 新栄町の「ひょうたん踊り」

ぶりな舞や滑けいな仕草は、種子島の民俗芸能の中でも異色なものといわれています。



平山 浜田の「ひょうたん踊り」



平山 仲之町の「ひょうたん踊り」

どすこい(すもうとり節)

「どすこい」は、慶応年間、種子島の殿様のお祝いの時、西之表市の洲之崎(すのさき)の人たちが、本土から来た人たちに習ったものだそうです。その後、明治末期に集団赤痢が発生し、多くの人亡くなった時、この踊りを踊って無病息災を祈ったそうです。



島間 田尾の「どすこい」

七九の竹(刺竹の竹)



島間 上方の「七九の竹(刺竹の竹)」

「七九(刺竹の竹)」は、島間上方集落だけに伝わる女性の手踊りで、茎永上里集落の日高ウラさんの母が島間の上方集落に嫁に来て、教えた踊りだそうです。踊りの名称である「刺竹(しちく)」は熱帯系の竹で、節にトゲが生えている竹ですが、現在は「七九の竹」とも記されています。

十二提灯

「十二提灯」は、島間上方集落だけに伝わる踊りで、とてもこっけいで良い踊りです。



島間 上方の「十二提灯」

御縁節

「御縁節」は、もともと甑島（こしきじま）の踊りで、西之の野大野集落に集団移住して来た甑島の先祖の方が伝えたものといわれています。

男女青年の踊りで、列になって踊り、交互に入れ代ったりします。

西之 野大野・上瀬田の「御縁節」



ちくてん

「ちくてん」は男性の手踊りで、琉球（沖縄）から伝わったといわれています。集落によっては、女性も踊っています。



上中 西之町の「ちくてん」

ヤートセー

「ヤートセー」は、いつ、どこから伝わったかわからないほど古くから踊られており、全島各地で広く踊られています。ヤートセーは恋愛ものなどの長い物語の歌で、最後まで歌えば1時間もかかるので、途中で「ここで切りましょ」と歌って、打ち切ります。踊りの名称の由来は、「ヤートセー」という囃子から来ているようです。

ヤートセーは一般的に女性が主体となって踊り、男性は太鼓や鉦といった楽器役ですが、地域や集落によっては、男性だけで踊る所や平山広田集落のように踊りも太鼓などの楽器も全て女性が行う所もあります。



平山 広田の「ヤートセー」

平山西之町集落のヤートセーは、踊りの中に「おつやの家の模型」を引き入れて踊り、その美しい「おつや」に恋する伝七が、おつやの家に忍び込むという場面も見られます。



平山 西之町の「ヤートセー」

また、上中上野集落のヤートセーは歌を「笠踊り」に仕組んだもので、笠踊りとも呼ばれています。つんぼり笠を持って踊る振付は、大変見栄えが良い踊りです。



上中 上野の「ヤートセー（笠踊り）」

棒踊り

西海 牛野の「棒踊り」

「棒踊り」は鹿児島県薩摩半島の加世田方面の踊りを伝承しており、島内各地で広く踊られています。また、集落によっては、鎌を使用した鎌踊りや道化役の鬼がついて踊る所もあります。



上中 仲西の「棒踊り」

上中 本町の「棒踊り」



ナギナタ踊り

「ナギナタ踊り」は、仇討（あだうち）物語の踊りで、「団七口説」「おつや口説」「弥市口説」などの口説があるが、「団七口説」の仇討物語が多く踊られています。男性と女性の列が相對して斬り合う面白い民俗芸能で、鹿児島県大隅半島の内之浦にも伝えられています

島間 田尾の「ナギナタ踊り」



男性と女性の列が相對して斬り合う面白い民俗芸能で、鹿児島県大隅半島の内之浦にも伝えられています

弁慶踊り(べんけい踊り)

下中 里・山神の「弁慶踊り」



「弁慶踊り」は牛若と弁慶の戦いを踊りに仕組んだものです。歌や口上、踊り方は集落によってやや異なるが、全体としては大体同じです。初めに広場の中央で

牛若と弁慶の口上があり、その後、牛若の群と弁慶の群が賑やかに出て来て、斬り合います。

げんごばあ

荃永 上里の「げんごばあ」



「げんごばあ」は、翁と媪（おじいさんとおばあさん）の古い踊りで、とても骨けいでおもしろい踊りです。

荃永の上里集落で伝承されていますが、昔は平山の西之町集落でも踊られていたそうです。荃永では、昔、種子島の殿様が来られた時に披露したそうです。

げんごばあは、歌詞や踊り方から、おそらく近世中期頃からあったものといわれています。

かじょうがね (オオヨメジヨウ)

「かじょうがね」は、島間エビス神社の奉納踊りで、7名のオオヨメジヨウが「サカナバチ」と呼ばれるスゲ笠を持って踊ります。歌う人は6名で、「ジウタ」と呼ばれ、声を長くひいて歌います。



島間 仲之町の「かじょうがね (オオヨメジヨウ)」

歌詞に琉球語が入っており、昔、琉球と密貿易していた影響ともいわれています。

四国山、じゃみはげいこ (オオニサー)



「四国山、じゃみはげいこ」は「オオニサー」と呼ばれる青年たちの踊りで、「かじょうがね」と同様、島間エビス神社の奉納踊りです。

島間 仲之町の「四国山、じゃみはげいこ (オオニサー)」

くらまぐち

「くらまぐち」は、西海立石集落に伝わる民俗芸能で、旧暦9月9日の願ほどきとして奉納されます。踊りは塩たきに由来し、塩屋の氏神「天照大神」に奉納する踊りで、昔は西海の大川集落や西之の砂坂集落でも踊られていたそうです。

踊りの起源は鎌倉時代といわれていますが、「ほろほろ」という文句があることから、近世のものと考えられています。また、この踊りには2種類の歌詞があり、年交替で踊られるそうです。



西海 上立石の「くらまぐち」